

関ヶ原合戦の真相～三成の戦略と誤算～

～その勝敗を分けたものは何だったのか？～

淡海歴史文化研究所

所長 太田 浩司

はじめに

- ・関ヶ原合戦に関する研究は最近目覚ましい進展がある。その中で、石田三成は如何なる思いで、家康を迎え討とうとしたか。あるいは、どんな戦略で大垣城に籠城し家康を待ったか。家康はなぜ大垣城攻撃をやめて関ヶ原へ向かったか等々を、近世の軍記物に頼らず、なるべく一次史料や現場の記録から辿ってみたい。
- ・合戦当日の戦略も、両者の思惑を考察し、主に西軍視点から関ヶ原合戦の全貌について迫りたい。

1 関ヶ原合戦・戦後処理の経過

- ・慶長3年（1598）8月に秀吉が没してから、豊臣家を無視し独自の政権を確立しようとする家康（伊達家との婚姻、前田家・上杉氏への糾問）に不満を抱く三成は、慶長4年（1599）閏3月から佐和山城で、七将襲撃事件を受け謹慎していたが、家康打倒の念を抱く。

慶長5年（1600）

- ・6月16日 徳川家康、関東に向かう
再三の上洛命令に従わない会津の上杉景勝を討つため、徳川家康は手兵を率いて大坂城をたち関東へ向かう。
- ・7月2日 家康、江戸へ入る
家康が江戸城へ入ったが、豊臣恩顧の諸大名もこれに従う者も多く、福島正則や黒田長政・藤堂高虎など55,000の兵が東国へ向かった。
- ・7月11・12日 三成、吉継、西軍挙兵を決する
石田三成は佐和山城で大谷吉継・安国寺恵瓊らと会談し、家康打倒の相談を行なった。ここで西軍挙兵の盟主に五大老の一人毛利輝元を仰ぐことに決め、輝元もその招きに応じ、7月17日に大坂城西の丸に入った。
- ・7月17日 西軍挙兵 三成、家康への宣戦布告
長束正家・増田長盛・前田玄以の三奉行の名で、徳川家康の罪状十三ヶ条を列挙した「内府ちがひの条々」が各大名に送られ、三成を中心とする西軍は家康への宣戦布告に踏み切る。

・7月21日 家康が会津に向かう

・7月25日、東軍の小山会議が開催される

通説によれば「小山評定」が開催され、家康が上杉攻めに従軍した豊臣諸将の去就を問う。諸将による何らかの談合は想定されるが、西上武将が全員集結しての「小山評定」はなかったという説も最近発表され、研究者間で議論がなされている。

・7月27日 黒田長政が小山から西国に向かう

福島正則や池田輝政は、前日に出立している。『黒田家譜』によれば、長政は途中の相模国厚木から呼び戻され、家康と密談して再び西上した。長政召喚の理由は、福島正則が西軍に加担する危険を憂慮した為とされる。

・8月1日 東軍の伏見城が落城する

東軍の鳥居元忠が守る伏見城が、三成等の西軍に攻撃され陥落する。8月5日付けの真田昌幸ら宛て石田三成書状(真田家文書)は、元忠は石垣をつたって逃げようとしたが、三成方の鉄砲頭鈴木重朝によって討ち取られたと記す。

・8月5日 三成、**尾張・三河国境での決戦構想**を暗示

三成は真田家へ送った手紙で、尾張国と三河国の間以西を勢力圏と見る。その国境での決戦構想を持っていたと見られる。また、清須城主であった福島正則の西軍への囲い込み工作を続ける。

・秀吉股肱の臣である正則の西軍参加は、濃尾地方の中心である清須城主という地位もあって、三成は大いに期待していたようである。しかし、正則は三成の説得工作が行なわれている最中も、東軍方との連絡を密に取っていた。つまり、三成の説得工作が功を奏す可能性はゼロに近い状態だった。

・同日、家康は江戸に戻る

・8月11日 **尾・三国境 決戦構想の破綻**三成、大垣城へ入るが、尾張・三河国境での決戦構想の破綻を悟る

三成は美濃大垣城へ入ったが、尾張清須城主・福島正則を取り込みに失敗したこと知ったのもこの頃。8月10日に三成が真田家に送った書状では、美濃・尾張国境の木曾川での決戦構想を表明する。

・8月13日 三成が尾張国葉栗郡前飛保村(愛知県江南市)にある**曼陀羅寺へ禁制を発する**

木曾川南岸にある曼陀羅寺への禁制発給は、尾張・三河国境への進出を完全に諦め、美濃と尾張国境の木曾川での決戦構想を固めたことを示す。

- ・ 8月23日 **濃・尾国境 決戦構想の破綻**福島正則らの攻撃により西軍の岐阜城が陥落する
 前哨戦として、米野（笠松町）の戦いや竹ヶ鼻城（羽島市）の戦いがある。三成は岐阜城支援のために長良川の渡し・河渡（岐阜市）まで出陣したが、黒田長政・藤堂高虎によって撃退された。岐阜城陥落で三成の木曾川での決戦、つまり美濃・尾張国境での三成の決戦構想が破綻し、決戦の地は美濃国内へ移る。
- ・ 8月24日 東軍、美濃赤坂の岡山（岐阜県大垣市）に陣を敷く
 岡山は三成が籠る大垣城から西北へ4キロの場所にあり、両軍の対峙が始まった。三成は大垣籠城戦を意識する。
- ・ 9月1日 岐阜城の落城を聞いて、家康が江戸を発つ
- ・ 9月13日 東軍拠点・田辺城の開城
 細川藤孝（幽齋）の田辺城（京都府舞鶴市）は、西国唯一の東軍拠点となっていた。50日間の籠城戦の末、開城する。
- ・ 9月14日 東軍諸将に遅れて関東をたった家康が岡山の本陣に到着する
 動揺する西軍の士気を鼓舞するため、三成の家臣・嶋左近は、大垣城と岡山の間にある杭瀬川で、東軍の中村一栄（かずしげ）・有馬豊氏隊へ挑発を行ない、中村の家老の野一色頼母を討ち取るなどの戦果を上げる
- ・ 9月14日夜 **大垣籠城戦の破綻**家康、関ヶ原へ軍を動かす、三成も関ヶ原へ軍を動かす
 家康は諸将を集めて軍略を議し、大垣城を攻めず、西に進み三成の本拠・佐和山城を陥れ、大坂まで進撃することに決し、早速軍を関ヶ原に進める。この動きを察した三成は、美濃と近江の国境に全軍を進め、近江への街道を封鎖する形で東軍の進軍を止める作戦に出た。西軍は夜陰の中を行軍し、東軍の先回りをする形で関ヶ原に全軍を展開する。
- ・ 9月15日 **関ヶ原敗戦・逃亡**関ヶ原合戦で西軍が敗退する、三成戦は場から逃亡、西軍敗退の鍵は、松尾山の小早川秀秋の裏切りと毛利軍の不参戦にあった。三成は伊吹山方面へ逃亡する。逃亡途中、浅井郡谷口村（長浜市谷口町）の庄屋宅に匿われた。
- ・ 9月17日 **佐和山落城**三成の妻子、父正継、兄正澄がいる佐和山城が落城する
 三成不在の佐和山城が落城する。
- ・ 9月21日 **三成捕縛**三成が近江で捕縛される
 三成は田中吉政の家臣によって、近江国伊香郡古橋で捕縛された。近くの伊香郡井口村（長浜市伊香郡古橋）で3日を過ごした三成は、24日に井口村を出て大津に向かって連行される。

- ・9月25日 三成大津連行大津城で徳川家康と対面する
大津城は東軍の京極高次が守備していたが、9月15日に開城。家康は、20日にこの合戦で荒廃した大津城に入り陣所とする。陣所では三成を丁寧にもてなしたという。
- ・9月26日 徳川家康と共に大坂へ入る
その後、大坂・堺・京都の町中を引き回される。
- ・10月1日 三成処刑京都六条河原で処刑される

2 大垣城と関ヶ原の戦い

ア) 大垣城の関ヶ原合戦

- ・石田三成は大垣城へ8月11日には入っていたが、8月23日の岐阜城陥落を受けて、大垣籠城の思いを強くしたと思われる。
- ・9月14日晚になって、家康は突然、三成の本拠の佐和山や、京大坂の西軍本拠を突く作戦に切り替え西へと進軍を始める。大垣城にいた三成は、その情報を得ると、決戦の場を美濃・近江国境の関ヶ原とし、南宮山の南側を通過して先回りして東軍を迎撃した。
- ・大垣城にいた相良頼房・秋月種長・高橋元種は東軍に身を投じ、三成に近い熊谷直盛らを殺害した。本丸にいた三成の女婿の福原長堯のみ籠城を続けたが、23日になって開城した。『おあん物語』は、この大垣籠城戦における少女「おあん」の体験談とされる。

イ) 「天下の落居は、ただこの一城に極まり」

- ・この大垣城攻防戦については、東軍の保科正光が、その家臣たちに出した、8月29日付けの書状2通が注目される。正光は当時、浜松城を守備していたが、先陣の美濃国の戦況を伝えている。
- ・大垣に籠城した西軍は石田三成、宇喜多秀家、小早川秀秋、島津義弘、小西行長ら2万の軍勢。8月26日から7万（あるいは8万）の軍勢の東軍が攻城していること。
- ・三成は伊勢国に展開していた毛利軍（8月下旬に南宮山着陣）に、大垣城の支援に来るよう（「後詰」という）連絡しており、大垣城攻防戦の前にこの毛利軍と、赤坂に集結した東軍主力との合戦が行なわれる可能性が高いことなどを記す。
- ・このこの毛利軍との戦いは、「天下の弓箭（合戦のこと）、この時に極まり候」であり、さらに大垣城攻防戦を指して「天下の落居は、ただこの一城に極まり候」と述べている。つまり、大垣城周辺での攻防戦が、今後の天下の趨勢を左右すると述べている。
- ・この段階で、正光をはじめとする東軍方としては、大垣城周辺の決戦により、勝敗が決まると考えていた。この点は、石田三成の考えと一緒であったが、実際は14日晚の家康の決断により、東軍は西へ動き、西軍はその進軍を止めるため関ヶ原に至った。
- ・この東軍の移動は、東軍諸将すら意外で突然の行動だったが、これに連動して関ヶ原で戦わざる得なくなったのは三成にとって三度の誤算だった。

3 関ヶ原合戦の真相 (9月15日の真実)

ア) 西軍総大将・毛利家の動向

- ・関ヶ原出陣毛利家の中での静観派の吉川広家・福原広俊と、主戦派の毛利元康・小早川秀包（大津城攻撃軍）との対立は深刻であった。
- ・三成に近い毛利元康（元就8男）は関ヶ原合戦において、小早川秀包（元就9男）と共に大津城攻撃に従事していたので、関ヶ原の本戦に合流できなかった。
- ・美濃国関ヶ原で毛利軍の動向を握っていたのは吉川広家であり、陣中にいた福原広俊を味方にしており、広俊を後見に仰いでいた総大将の毛利秀元も動きがとれなかった。
- ・さらに、三成に近い安国寺瓊恵の軍は、多くが広家に近い国衆によって構成されていたことから、南宮山の毛利軍は吉川広家とその指揮権を握っていた。この状態のなかで、三成と気脈を通じる安国寺は動けない状態となった。
- ・吉川・福原両氏は9月14日、秀吉旧臣の黒田長政・福島正則、家康家臣の井伊直政・本多忠勝から、毛利氏と領土の保全の起請文を得る。西軍は総大将である毛利家自体が軍を動かす積もりがなく、全体の統制が出来ていなかった。
- ・光成準治氏によれば、関ヶ原合戦における毛利氏主将の秀元は、当初は実子がなかった輝元の後継者と見られていた。しかし、輝元の実子・秀就の誕生により、事実上廃嫡された経緯がある。
- ・どちらかという疎んじていた家中勢力（秀元と広家）を美濃関ヶ原に送った輝元の本心は、自領における毛利当主の一元的な支配体制を確立するため、秀元や広家、それに国衆の疲弊を図るものだったと光成氏は言う。

イ) 「山中合戦」説の検討

- ・「関ヶ原合戦」当日から間もなく発給された古文書に検討を加え、江戸時代の軍記物によって脚色されない、合戦の真相を確認する。近年、合戦があったのは「山中」で、「関ヶ原」では合戦がなかったという新説が出ている。

〔史料1〕（慶長五年）九月十五日付「伊達政宗宛「徳川家康書状」

今十五日午刻、於濃州山中及一戦、備前中納言（宇喜多秀家）・島津（義弘）・小西（行長）・石治部（三成）人衆悉討捕候、直二佐和山迄、今日著馬候、大柿（大垣）も今日則捕候、可御心安候、弥其表之様子、弥御仕置等尤候、恐々謹言、

（慶長五年）

九月十五日

家康（花押）

大崎少将（伊達政宗）殿

【伊達家文書】

- ・徳川家康が、陸奥国の伊達政宗に対して、関ヶ原合戦の勝利を伝達した文書である。注目すべきは、合戦を行なった場所を「山中」と言っていることである。この「山中」の地名は、現在の岐阜県不破郡関ヶ原町の中で、通常関ヶ原合戦の主戦場付近とされる関ヶ原宿の集落から、近江寄りの西へ中山道を行った場所で、大谷吉継等の陣所跡や墓が

- ある所である。合戦の場所を、敢えて「山中」と合戦当事者が言っていることになる。
- ・討ち捕った武将として宇喜多秀家・島津義弘・小西行長・石田三成を上げている。合戦前に北陸（前田家）攻略を担当するなど別行動を取ることが多かった大谷吉継を抜き、東軍の家康は、この4人が西軍の主力と考えていたことを示す。
 - ・もちろん、関ヶ原合戦当日において、この4人は戦場から逃亡し、本書にあるように討死しなかった。この4人討死の記述は、戦果を誇張するための家康の虚言である。
 - ・家康の虚言が本書にもう一つある。合戦当日に家康が三成の居城である佐和山にまで至ったとあることだ。太田牛一の著『関ヶ原御合戦双紙』では、15日夜は「山中大谷刑部少輔居陣の小屋」に陣を置いたとするのが正しいと思われる。
 - ・佐和山まで至ったとするのは、一日で敵（三成）の本拠まで至ったことを強調することで、西軍討滅の戦果を誇張して喧伝する目的があり、陸奥で西軍と対陣していた伊達政宗を自軍に引き留めるための工作であった

ウ) 伊達政宗書状にも「山中合戦」

- ・（慶長五年）9月晦日付で、伊達政景ほか五名宛の伊達政宗書状（留守家文書）は、「去る十五日、大柿（大垣）への助衆へ、是非合戦に及ぶべきの由候て、十四日ニあか坂近辺へ御陣越し候処ニ、大柿ニ籠り候衆夜中ニまきれ、ミの（美濃）ノ山中と申す所へ打ち返し陣取候」とある。
- ・伊達政宗が家臣6人に対し「関ヶ原合戦」について、上方の今井宗薫からの手紙や、それを持参した使者からの伝聞を伝えた内容である。
- ・関ヶ原合戦の戦況が簡潔に纏められている。西軍が籠る大垣城への援軍（大柿への助衆）と合戦に及ぶため、14日に赤坂辺りに東軍の軍勢が移動したが、大垣籠城衆が夜中に紛れ、美濃国山中という場所へ移動し、向きを変えて（それを追った）東軍に向けて陣を敷いた。
- ・15日未明に東軍が山中の西軍へ攻撃を行ない押し崩し、大谷吉継・戸田重政・島津又一郎・平塚為広らをはじめ、西軍の東軍への突入部隊を悉く討ち捕った。石田三成・宇喜多秀家・島津義弘・小西行長は山に逃げ入り消息がつかめないでいる。
- ・夜中に大垣を出た籠城軍は、「山中」で「打ち返し」とあるので、明らかに佐和山がある西への進軍を止めて、追って来た東軍を向かえ撃つため方向を変えたのであろう。そこへ15日未明に東軍が追いついて、攻撃を仕掛けたと読める。
- ・さらに西軍の「先をも心懸け候衆」を東軍が討ったとあるので、西軍は攻撃してくる東軍を突破し、家康本陣を攻撃する意図があったようにも読み取れる。ここでも主戦場は「山中」であり、西に進軍する西軍が転進し、東軍を迎え撃った合戦であったとする。
- ・同書には、「佐和）山、宗薫の書中ニは、本丸ハ今に持ち候由ニて候か、此飛脚すりはり（磨針）をとをり候へハ、はや本丸も焼候を見て来候」とある。政宗への宗薫書状が書かれた16日には、未だ佐和山本丸は堅持されていたが、17日に使者が同城を遠望できる磨針峠（彦根市下矢倉町）を通った時には、本丸から火が出ていたとある。17日の佐和山落城を、リアルタイムに伝える。
- ・上記の「山中」を戦場とする文書は、東軍側の諸将の意識を表すのみで、さらには家康の周辺の武将たちの思いを伝えるものばかりで、東軍の他の武将や、西軍側の武将たち

の思いを表す文書は考察していない。「山中」が攻撃目標だったことを示すのみ。

- ・西軍の布陣が「山中」のみであったかは、家康の思いや東軍側の古文書のみからは実証不可能。したがって、これらの文書の考察のみでは、通説の西軍陣形を否定する根拠にはならない。

エ) 近世地誌による「関ヶ原合戦」

- ・『庵主物語』は合戦から74年後の延宝2年(1674)に関ヶ原町の九兵衛が纏めたものと知られる。そこに、地元・関ヶ原で伝えられる両軍の布陣が記されている。74年前とえば、祖父の時代の話である。地元で合戦当時から伝えられてきた伝承を、かなり正確に記述していると見ていいだろう。

〔史料2〕 『庵主物語』

慶長五年子ノ九月十五日関ヶ原ノ御合戦承及覚

- 一、御旗本ヨリ石田治部少輔(三成)陣所迄廿四町程、
- 一、石田治部少輔ハ小池村
- 一、島津兵庫(義弘)ハ小関村
- 一、小西撰津守(行長)ハ天満山
- 一、同南ノ山ハ宇喜多宰相(秀家)
- 一、松尾山ハ筑前中納言(小早川秀秋)・小川左馬助(祐忠)
- 一、山中村宮ノ上ハ大谷刑部少(吉継)・大谷大学(吉治)
- 一、峠(藤下)村ニハ赤沢越中守(赤座直保)・脇坂淡路守(安治)・平塚因幡守(為広)・平塚庄兵衛・戸田武蔵(重政)・戸田内記・朽木河内守(朽木元綱)也、

- ・小池村・小関村は、関ヶ原から西北に伸びる北国街道沿いの村であり、天満山は小池村・小関村から南の山中村に続く小山である。松尾山の麓に山中村と藤下村が展開する。ここでは、小池村の笹尾山にあった三成本陣から、山中村の吉継本陣、そして松尾山の秀秋本陣と展開する、通説と変わらない布陣が記されている。
- ・美濃国の代表的な地誌として知られ、天保年間(1830~44)に尾張国丹羽郡下野村(愛知県丹羽郡扶桑町高雄)の間宮宗好が書いた雑録を集成したは、東軍の最前線に福島正則と井伊直政の重臣である木俣左京を並べるという独自の関ヶ原合戦図を掲載するものである。木俣の名前を前面に出す合戦図は類例がない。
- ・ここに見える西軍の布陣は、小関村周辺に三成家臣嶋左近や蒲生郷舎の備え、その後方に三成の本陣があり、東南の方に向かって陣を向けたとする。さらに、その後方に島津・小西の陣があり、松尾山に小早川の軍、その麓に大谷や小川らの軍、「山中の山」つまり天満山に宇喜多秀家という布陣になる。この布陣も通説とまったく相違ない。
- ・また、天保年間(1830~44)初年から万延元年(1860)まで実に30年かけて、尾張藩士の岡田啓(文園)によって編まれたというには、「関原村」の項目に「慶長五年戦場は北の方北国街道の原野そのあととなり」とある。その戦場が北国街道に沿った関ヶ原全体に広がっていたと認識されている。
- ・『美濃雑事記』・『新撰美濃志』などの記述も、通説と大きな変わりはない。こういった

地誌や地元の情報が、近代になって明治 25 年（1892）に出版された神谷道一『関原合戦図志』などに纏められ、現在の通説になっていると見てよいであろう。

オ) 薩摩藩島津家『旧記雑録』に見る関ヶ原

- ・西軍側の武将の合戦観が知られる一次史料としては、薩摩藩島津家の『旧記雑録』に収められた「関ヶ原合戦」に参戦した島津氏家臣たちの覚書である。
- ・まず、『在伊地知増也老送于三原九兵衛殿之一卷』には、「石田治部少輔三成・小西撰津守行長敵之旗頭を見て、藤河を討越人数を押出、小関村之南北辰巳ニ向て備を立る、大谷刑部少輔・平塚因幡守・戸田武蔵守・同子息内記・津田長門守以下石川峠ニ陣取しか引下し、谷川を越関ヶ原之野へ押出し、味方之山之手を後ニ当て、真東ニ向て陣を張」とある。
- ・大谷らが陣した山中村から関ヶ原にかけての地域の他に、北国街道が通る小池村の一部・小関村に石田や小西が陣した場所があったことを示している。これは、通説で言う石田や小西の陣所とそう矛盾はない。
- ・「黒木左近平山九郎左衛門覚書」には、「備前中納言殿（宇喜多秀家）陣所 惟新様御陣所之間に池有り、中納言殿人数皆々池江逃入申、此方之陣場ニ乱入」とある。
- ・宇喜多秀家と島津義弘の陣所の間に池があったというのは、宇喜多が陣した南天満山の北西に当る現在の池寺池を指すと見られ、通説で言われる陣形が再現できる。
- ・さらに、『神戸久五郎覚書』では、「東ハ石田治部殿陣猛勢相掛一戦有之候得共、石田殿陣茂相崩、其敵則此方之陣江相掛申候、此方之御陣ハ式番そなへニ而候」とある。島津の陣の東方に三成の陣があったとする。
- ・これは、笹尾山から北国街道にかけて三成やその家臣の嶋左近・蒲生郷舎の陣が広がっており、その後方（西）島津の陣があったと考えれば通説と矛盾しない。通説では島津の陣も前線のように読み取れるが、嶋や蒲生の陣が北国街道を占拠していたとすれば、第二陣となるのも理解できる。
- ・『旧記雑録』に収められた、島津氏家臣の覚書からは、通説を覆す記述は存在しない。

カ) 「関ヶ原」での合戦を示す史料

- ・先に紹介した以外の当時の一次史料を読み直してみよう。まず、公家の近衛前久（近衛家文書）が、その子・信尹に宛てた 9 月 20 日付けの書状である。
- ・東軍が「青野カ原ニテノ合戦ニテ候、即時ニ切立獲得大利候、番ヒニ金吾手ヲカヘサレ候、其太刀場ニテ、大谷刑部討死候テ、其マヽキリ崩候、上方ヨリ出陣ノ人数五万計候、四五千モ討死候ト申候」とある。
- ・ここで、合戦場を「青野カ原」と呼んでいる。この地名は、現在の大垣市の北西端の青野町を中心に、東の青墓町から西の垂井町府中にあった野原を指す。付近は古代の美濃国分寺や国府があった所で、東山道や鎌倉街道の要衝の地であった。
- ・南北朝期の延元 3 年（1338）1 月 28 日には、西上する北畠顕家軍と、それに対する北朝軍の土岐頼遠・桃井直常らの軍が衝突した「青野原の戦い」が行なわれた場所としても知られる。京都の公家にとっては、関ヶ原と青野原の区別はつけ難く、美濃と近江国境近くという意味で、当時京都でも有名だった「青野カ原」を使用したものであ

- ろう。
- ・あるいは、前久の所に来た情報自体が「青野カ原」で合戦があったとの話だったのかもしれない。この書状の記述は、関ヶ原合戦が決して山中村付近のみの局部戦ではなく、より広域な関ヶ原全体で展開したことを予想させる。
 - ・小早川秀秋の離反を「番ヒニ」とあるのは、合戦開始と「同時に」という意味にとれる。小早川は合戦の途中から離反したのではなく、合戦の当初から東軍方につく姿勢を見せた根拠になる。両軍を、それぞれ5万人とするのも、通常10万人を超える兵数で言われるより現実味があるように思う。
 - ・9月17日付の松平（和泉守）家乗宛、石川（長門守）康通・彦坂（小刑部）元正連署書状写（堀文書）に「十五日巳之刻関か原へ指懸被為及一戦、治部少輔・島津兵庫・小西・備前中納言四人ハ、十四日之夜五ツ時分ニ大柿外曲輪を焼払、関か原へ一所ニ打寄申候つる、此地の衆并井兵（井伊直政）又福嶋（正則）殿、為先手其外悉打続、敵節所を抱有所へ指懸、とりむすひ候刻、筑前中納言（小早川秀秋）・わき中書（脇坂安治）・小川土佐（小川祐忠）父子、此四人御味方被申、うらきりを被致候、則敵敗軍仕、追討ニ無際限うちとり申候とある。
 - ・本書は、東軍の清須城預りであった、家康家臣の石川康通と彦坂元正が、三河国吉田城（愛知県豊橋市）にいた松平家乗に対して、関ヶ原合戦から二日後に、戦況を伝えたものである。徳川家内部の書状であるにも関わらず、その戦場を「関か原」と呼んでいる。
 - ・本書では井伊直政や福島正則らが西軍に攻撃をしかけた所、小早川らが味方になったと記しており、小早川は最初から東軍を表明していたのではなく、戦闘が始まってから裏切り行動に出たように記す。戦闘の開始と小早川の離反は、少々時間差があったように読めるのは、先の近衛前久の記述とは相違する。
 - ・小早川の西軍離反は合戦前か途中からか。これは、一次史料においても微妙で、合戦参加武将によって捉え方が異なる可能性が高い。ただ、通説に言うような開戦から離反まで4時間かかったという時間差は誤りで、家康による「問鉄砲」もなかった。

キ) 吉川広家自筆書状を読む

- ・西軍の吉川広家の自筆書状（吉川家文書）について検討を加える。

〔史料3〕（慶長五年九月十七日） 吉川広家自筆書状

一、惣御和談之事、其許相伺候而可相調事候つれ共、敵之手前先書ニ申上候、内府着ニ付而、至青野か原、悉先陣衆ハ打出、最前陣所へ者内府被入移候、〈左候て行之様子相聞え候分ハ、人数二手ニ分候而、一手ハ山中へ押入、筑中（小早川秀秋）左候へは「然處」、筑中御逆意は色立仕合候、就其大柿衆も、〈彼地被居候事不成候而〉如山中、大刑少（大谷吉継）陣■無心元之由候て、被引取候、是ハ佐和山へ二〈番〉「重」引可仕覚悟（眼前候、さ候へは御弓鉄）「と相見え候、惣別」御味方とメ被出候、一昨日十五日、内府様直ニ山中へハ被押寄被及合戦、即時被討果候、昨日至江州二手

ニ被分乱入候、当手之事、北口之手同前ニ打出可然之由、福左黒甲より被申候条、

【後略】

* 〈 〉 は見せ消し部分。「 中 」 内は修正部分。

- ・本書は、関ヶ原合戦を一昨日としているので、9月17日に作成された文書で、南宮山に陣した吉川広家が、合戦の状況を主君の毛利輝元に報告するために記された覚書。この中で、合戦となった場所を「青野か原」と言っている。先の近衛前久書状と同じで、遠方から来た武将たちが、南北朝の激戦地「青野か原」と関ヶ原の区別がつかなかったもので、合戦が展開した関ヶ原を全体的にとらえた地名と見られる。
- ・見せ消し部分に当たるが、東軍は軍勢を「二手」に分けたと記し、その一手が「山中」に押し入ったとしている点である。この押し入った軍隊が、徳川家康が主力と判断していた福島正則と黒田長政の軍で、省略部分から、その後から加藤嘉明と藤堂高虎が続いたとされる。
- ・本書では合戦後の16日、近江へ攻め入る際にも、二手に分かれて「乱入」し、吉川は「北口之手」を任されたと記す。この「二手」に分かれての近江侵攻は16日の話だが、15日の「二手」と同じ道筋を指すのではないだろうか。その一方が、中山道が通る山中村であれば、もう一方の「北口之手」は、関ヶ原宿から別れた北国街道が通る小池村と見るべきだろう。
- ・これらの記載から、「関ヶ原合戦」での家康の戦略は、山中村を突破して中山道を通り、佐和山へ至ることであった。これに対し、東軍の中にはもう一手の北国街道を守っていた三成本陣に向かった部隊もあったのである。この部隊も、三成がいた小池村を突破すれば、近江国内に侵攻する予定であった。
- ・本書は、「関ヶ原合戦」の戦場が、徳川家康が主戦場と理解した山中村周辺よりも広く、西軍の布陣は通説通り、小池村にあった笹尾山の三成本陣まで続いていたと見るべきだろう。
- ・関ヶ原合戦の西軍の布陣は「鶴翼の陣」と評される場合が多い。しかし、通説の陣形は、北国街道を押さえる三成陣、中山道を押さえる大谷・小早川の陣からなっており、その中間に位置する島津・小西・宇喜多の陣は、そのどちらにも展開できる体制を敷いていたと理解すべきだろう。

ク) 東軍の関ヶ原移動の意味

- ・家康はなぜ赤坂の陣所と大垣城での対峙を諦め、二手に分けて軍勢を西に進めたのであろうか。その答えとして、関ヶ原に参陣した島津氏家臣の覚書の中に見えている。「神戸五郎覚書」に、次のような記事がある。

〔史料4〕 『旧記雑録』所収「神戸五郎覚」

同日（十四日）夜入時分告来り候者、大垣城へハ関東勢之内より押勢を被召置、権現様ハ直ニ京都の如く被遊御上候之由相聞候、依之大垣之城江者勢ヲ残シ置、石田治部少輔を始、惟新様其外西国之軍勢、夜中ニ大垣を打立、南宮山下ヲ通、関ヶ原へ被遊

御出張候、

- ・大垣城の西軍は、家康をはじめとする東軍が、直接京都を目指すという情報を得て、南宮山下を通して軍を関ヶ原に展開したことになる。西軍の石田三成は、東軍が中山道と北国街道を通り、佐和山城から京都・大坂を直接攻撃するという情報を得たので、大垣城から出て関ヶ原へ出陣したのである。
- ・そこは、近江に入る両街道の分岐点であり、江濃国境という重要地点であった。三成の頭の中には、絶えず国境を意識した防衛ラインがあったように見える。江濃国境は、三成が考え得る最後の防衛ラインだったのである。
- ・三成は中山道と北国街道が分岐し近江に至る関ヶ原で決戦を挑む必要があった。東軍は当然のことながら、両街道の突破を狙った。その中で、家康が重視していたのは、大谷吉継が守る中山道沿いの山中村の突破であった。
- ・戦い全体としてみれば、北国街道沿いにも東軍は進軍し、戦闘は関ヶ原全体で展開した。家康の中山道を突破しての京都上洛への強い思いは、必ずしも合戦全体の推移とは合致しない。「関ヶ原合戦」においての西軍布陣は、通説通りと見た方がよいし、石田三成は笹尾山に陣して、北国街道を進み近江侵攻を目指す東軍と交戦した。

4 関ヶ原背合戦後の三成と家康

ア) 田中吉政への三成捕縛命令

- ・関ヶ原合戦直後、徳川家康から近江伊吹山方面に逃亡した三成追捕の命を受けたのは、三成と同郷の武将・田中吉政であった。軍記物『田中興廢記』は、徳川家康から「石田三成は佐和山に籠城しなかつたので、どの国に逃げたかは知ることができない。貴殿は三成と同じ近江の出身で土地勘がある。急いで北近江へ向かって、三成の居場所を探索せよ」を命じられたと記す。
- ・9月19日の段階で、家康とその家臣村越直吉が、三成の他、宇喜多秀家・島津義弘を捕縛するよう命じた文書（早稲田大学図書館蔵文書）が残っている。
- ・9月22日、徳川家康が田中吉政に三成追捕について指示した書状（柳川古文書館所蔵文書）には、「三成は小者一人を連れて、越前の方面へ逃走したと聞く。合戦場から京都の北方である八瀬・大原・鞍馬・丹波方面へも探索を行なうよう命じている。2・3日近江国内で休息してから、三成探索を行なうようにして欲しい。」とある。
- ・実は前日の21日、三成は田中吉政の家臣によって捕縛されていた。同じ9月22日付けで、徳川家康が吉政に三成捕縛を賞した書状の写（譜牒餘禄）も残っている。おそらく、二つの書状は同じ22日付けだが、出した時間が違うのであろう。前者を出した直後、三成捕縛の報が入り後者を出したのだろう。家康は捕縛から一日たってから、三成の生け捕りを知ったのである。

イ) 佐和山落城

- ・関ヶ原合戦により、三成が伊吹山方面に逃亡した結果、佐和山城の守りは、本丸にいた父の正継や、三の丸を守備していた兄の正澄に託されていた。17日に落城。

- ・徳川家康は9月15日の晩、美濃国山中村の大谷吉継の陣跡の小屋に泊まり、16日は藤川（米原市藤川）、17日には佐和山南の「沼波平田山（『井伊年譜』、雨壺山のこと、彦根市後三条町・平田町）」に陣を布き、城への総攻撃を命じた。
- ・関ヶ原で西軍から東軍に寝返った小早川秀秋と脇坂安治が、大手の鳥居本側から攻め上がり、田中吉政の部隊が北川の搦手（水ノ手）から攻め入った。
- ・城内は内応者も現れ、本丸に突入された石田正継や正澄、宇多頼忠（三成の舅）は自刃して果て、土田（どだ）桃雲は三成の妻を刺殺して天守に火をかけたという。城内の婦女は、本丸東方の断崖に身を投げて死亡したと伝える。当地を、「女郎ヶ谷」と伝える。
- ・9月晦日に東北の戦国大名伊達政宗のもとに届いた徳川家康からの報告（今井兼久の手紙）によれば、佐和山城はまだ本丸は落城していないとあった。しかし、この手紙を持った飛脚が磨針峠を通った時には、本丸が焼けているのを見たと記す（政宗が家臣に送った書状による）。

ウ) 近江国内の混乱

- ・家康は合戦後の世上の混乱を防ぐため、9月15日の合戦当日以降、美濃国・近江国や畿内に多くの禁制を出している。近江国内に16日に出された禁制だけでも5通（①～⑤）が知られる。
- ・①伊香郡内 12ヶ村宛、②浅井郡内 7ヶ村宛、③浅井郡内 19ヶ村宛、④坂田郡小野庄宛の9月16日付禁制が知られる。この他、⑤日野町中に与えた9月16日付禁制が近江国内のものとして知られる。その他、国内には19日付けで2通（堅田・近江八幡）、21日付けで1通（比叡山）、9月吉日付で1通（甲賀郡黒川（甲賀市））の禁制が出されている。
- ・家康は17日に雨壺山（彦根市芹川町）の本陣で佐和山城の落城を見ると、その日は雨壺山に泊まり、18日には近江八幡に泊まって大坂に向かうが、下街道（後の朝鮮人街道）を通っている。

エ) 徳川家康の凱旋

- ・中山道鳥居本宿から、中山道を分かれて、彦根・八幡と通過し、野洲郡行合（野洲市行畑）で中山道と合流する朝鮮人街道は、江戸時代に10回にわたって朝鮮通信使が往復する街道と使用された。その理由が、関ヶ原合戦に勝利した家康が、この街道を通過して大坂に凱旋した「吉例の道」とされたからという。関ヶ原合戦後、家康は一般にこの道を通して上洛したと言われるが、淀は通過したが京都へは寄っていない。
- ・その後、19日には草津に泊まり、20日には大津の陣営に到着、25日まで滞在した。26日に淀城、27日に大坂に到着している。
- ・大津の陣営では6泊するが、大津城に本陣を置いたと考えられる。家康の侍医板坂卜齋の記録によれば、城中の建物は敵の火矢の備えのため、屋根をまくってあったとある。火矢や砲弾への備えでもあろう。屋根がなくては陣所に使えないので、南門脇の長屋を陣所に使ったとある。ここは屋根があったのであろうか。
- ・20日には、関ヶ原に遅参した徳川秀忠が至り面会を請うたが、家康は怒って面会しなかったと言われる。

オ) 大津への三成連行

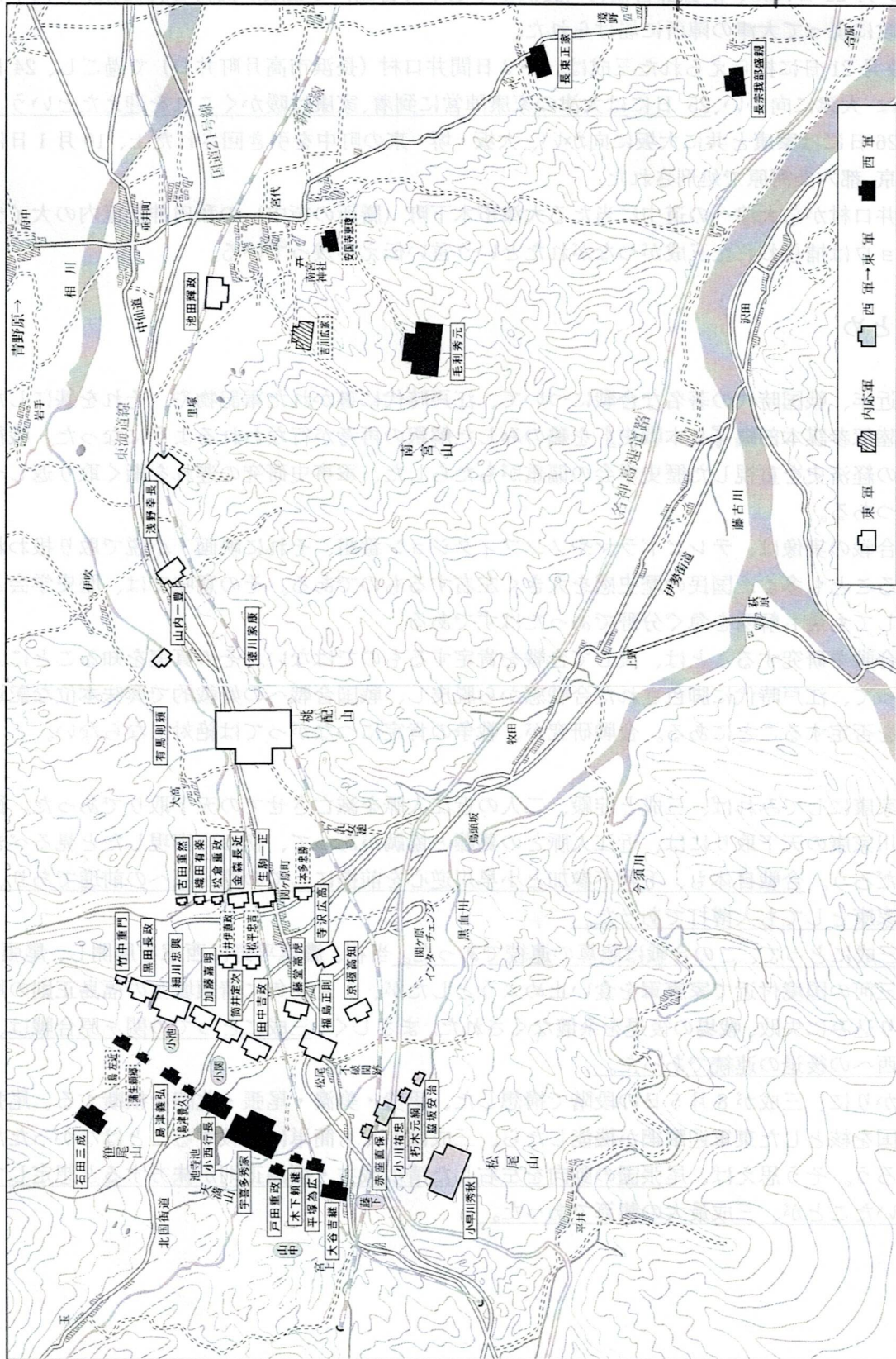
- ・9月22日には、伊香郡古橋村（長浜市木之本町古橋）で三成が捕縛された報が、田中吉政によって大津の陣所に届けられた。
- ・9月21日に捕らえられた三成は、2・3日間井口村（長浜市高月町井口）で過ごし、24日は大津に向かい、25日には大津の家康陣営に到着、家康は暖かくこれを迎えたという。26日には家康と共に大坂に向かい、大坂・堺・京の町中を引き回された上、10月1日に京都六条河原で処刑された。
- ・井口村から大津への道中に当たる大津市木下町（膳所の街中）の和田神社境内の大イチョウは捕らわれた三成がつながれたという言い伝えが残っている。

まとめ

- ・近年、戦国時代の著名な合戦について、江戸時代に書かれた軍記物や、それを基にした陸軍参謀本部編『日本戦史』を鵜のみした解釈の再考が行なわれるようになった。戦後の経済史を重視した歴史学会の偏重がもたらした、軍事史研究の遅れを漸く取り返しつつある。
- ・合戦の実像は、テレビドラマやノンフィクション番組、それに映画・小説で取り扱われることも多く、国民の歴史感を大きく左右するものである。その意味では、歴史学会としても最も解明を急ぐ分野であったはずである。
- ・合戦を研究することは、決して合戦を肯定するものではない。その真実を知ることによって、江戸時代に脚色された合戦感から脱皮し、戦国合戦への好戦的で興味本位な記述を否定することにある。合戦研究が、戦争の肯定につながっては絶対にならない。
- ・家康にしてみれば、三成と淀殿、二人の近江人脈を滅亡させての天下取りであった。徳川家康の天下取りには、近江人脈との葛藤と協調があつて、初めて実現したと見るべきだろう。合戦自体も、毛利不参加と小早川逆心を前提にしての関ヶ原への前進であり、家康としても大博打であった。
- ・三成にとって、この合戦は誤算の連続であった。当初、濃尾平野に西軍を展開し、尾張・三河の国境付近で家康軍を食い止めようとしたが、8月初旬に清須城主の福島正則の取り込みで失敗、戦場の後退を余儀なくされた。まさしく、三成にとっての関ヶ原合戦は、西への後退の連続であった。
- ・かりに、三成が8月5日の段階で構想した、伊勢・美濃・尾張・北陸を横断する、尾張国を核とした東軍迎撃網が機能したら、三成はかくも簡単に敗戦することはなかっただろう。そう思えば、尾張国の動向を左右した清須城主・福島正則が味方すると想定していたことが、三成最大の誤算であった。

太田浩司編『石田三成 関ヶ原西軍人脈が形成した政治構造』（宮帯出版、2022年）より

平京 → 平に侍る者



関ヶ原合戦布陣図